

# 狂言 その装束



(撮影 戸張良彦)

おにかわら かたきぬ  
黒地鬼瓦模様肩衣

平成11年10月9日(土)～11月23日(祝)



## 狭山市立博物館

〒350-1324 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園(ハイドパーク内)  
TEL042-955-3804 FAX042-955-3811

R240

古紙配合率40%の再生紙を使用しています。

## 開催にあたって

狂言は、能とともに室町時代に生まれた芸能です。

この時代は、京の都の大半を焼く野原にした応仁の乱や、相次ぐ天災のために、世の中は乱れに乱れ、明日のことも定かでない非常に厳しい時代でした。

常に死を目前に見据えて生きねばならぬこの絶望的な状況のなかで、たくましく懸命に生きた人々の喜怒哀楽を「笑い」に還元して描いたものが狂言です。

深い人間洞察に満ち、いつの世にも変わることのない人間の本质を描いた狂言は、六百年の長い歴史のなかで、さらに磨きあげられ、古典芸能として今日も演じ続けられています。

狂言はまた、舞台上で使われる装束から見ても、たいへん示唆に富んでいます。狂言の登場人物は、その装束からおおよその職業や身分がわかるくらい類型化され、演者の背をまるでキャンパスのように大胆に使った図柄は、それを着する人物の性格までの確に表現します。

今回は、狂言で上演時に着用される装束のうち、<sup>かたぎぬ</sup>肩衣や<sup>すおう</sup>素袍といった代表的な装束を展示いたします。

封建時代において芸能者にのみ許容された自由闊達な精神をもって、表現として許されるぎりぎりの範囲まで押し広げて、人間の真実を描いた狂言の世界を、こうした装束からもかいま見ていただき、狂言と、また狂言を生み出した日本の精神風土についての理解や関心を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、狭山市在住のご縁で貴重な装束の展示にご協力いただきました大蔵流狂言方の山本則直・泰太郎両氏をはじめ、関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

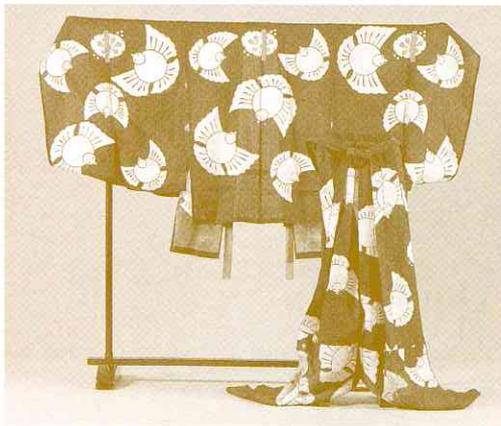


（撮影）戸張良彦

黄地立波模様肩衣

平成11年10月

狭山市立博物館



（撮影）戸張良彦

黒地鷹雀文様素袍

## 講演会

演題 『狂言 その装束』

日時 平成11年11月6日（土）  
午後1時30分～3時

場所 狭山市立博物館 研修・講義室

講師 大蔵流狂言方 山本 東次郎氏

● 受講希望の方は、10月20日（水）から狭山市立博物館へ電話でお申し込み下さい。（定員50名）

## INFORMATION

■開館時間 午前9時～午後5時

■休館日 10/12（火）、18（月）、22（金）、25（月）  
11/1（月）、4（木）、8（月）、15（月）、22（月）

■入館料 一般／150円（100円）  
高校生・大学生／100円（60円）  
小学生・中学生／50円（30円）  
※（ ）内は20名以上の団体

■住所 〒350-1324  
埼玉県狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園内

■電話 042-955-3804

■交通 ●西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分  
●西武新宿線「狭山市駅」西口からバス（稲荷山公園行）終点徒歩3分



# 狂言 その装束



おにがわら かたぎめ  
黒地鬼瓦模様肩衣

平成11年10月9日(土)～11月23日(祝)



狭山市立博物館

## 開催にあたって

狂言は、能とともに室町時代に生まれた芸能です。

この時代は、京の都の大半を焼け野原にした応仁の乱や、相次ぐ天災のために、世の中は乱れに乱れ、明日のことさえ定かでない非常に厳しい時代でした。

常に死を目前に見据えて生きねばならぬこの絶望的な状況のなかで、たくましく懸命に生きた人々の喜怒哀楽を「笑い」に還元して描いたものが狂言です。

深い人間洞察に満ち、いつの世にも変わることのない人間の本質を描いた狂言は、六百年の長い歴史のなかで、さらに磨きあげられ、古典芸能として今日も演じ続けられています。

狂言はまた、舞台上で使われる装束から見ても、たいへん示唆に富んでいます。狂言の登場人物は、その装束からおおよその職業や身分がわかるくらい類型化され、演者の背をまるでキャンパスのように大胆に使った図柄は、それを着する人物の性格までの確に表現します。

今回は、狂言で上演時に着用される装束のうち、肩衣かたぎぬや素袍すおうといった代表的な装束を展示いたします。

封建時代において芸能者にのみ許容された自由闊達な精神をもって、表現として許されるぎりぎりの範囲まで押し広げて、人間の真実を描いた狂言の世界を、こうした装束からもかいま見ていただき、狂言と、また狂言を生み出した日本の精神風土についての理解や関心を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、狭山市在住のご縁で貴重な装束の展示にご協力いただきました大蔵流狂言方の山本則直・泰太郎両氏をはじめ、関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

平成11年10月

狭山市立博物館

### 付 記

- ・このパンフレットは、平成11年10月9日から11月23日まで開催する平成11年度秋期企画展「狂言 その装束」のパンフレットである。
- ・会期中の展示替え等により、パンフレット収録資料（展示資料一覧）の資料でも展示していない場合がある。
- ・展示資料はすべて山本東次郎家所蔵のものである。
- ・資料写真撮影は、戸張良彦氏によるものである。

## 狂言の装束について

狂言の魅力あふれる舞台をさらに盛り上げているのが、風情豊かな季節のひとこまや事物を大胆な構成、奇抜な着想で描いた肩衣や素袍などの狂言装束です。あふれる情報と末梢的な感覚のみに生き、物事の本質を見極める時間も余裕も努力もない現代人には思いもつかない、はっとするような斬新で大胆華麗なデザインは、中世の人々の発想の豊かさ深さ、美意識の強さを教えてくれます。

狂言の装束は、ただ単に身を包むだけではなく、登場人物の性格や心理を的確に描写し、上演曲の雰囲気を作り上げます。

また、狂言の装束は、能装束が絹素材の「織り」であるのに対して、麻の「染め」が基本となっています。今回の企画展では、狂言の曲目によっては使用される能装束も展示いたしました。「織り」と「染め」の対照についてもご覧いただければ幸いです。

### かたぎぬ 肩衣

肩衣とは、袖のない上着のことで、礼服である素袍の袖は労働するときに不便なので、袖を切ったのが起源と言われ、それゆえ庶民の衣服となりましたが、最も簡略化された礼服としての意味も残されています。太郎冠者や、からだを使って額に汗して労働に直接従事するような役どころに使用されます。麻地で、必ず「狂言袴」とセットで用いられ、またこの時の着付は必ず「縞熨斗目<sup>しまのしめ</sup>」を使います。背中大胆奇抜奔放な図柄によって、もつとも狂言らしい装束と言われます。



薄茶地蕨模様肩衣<sup>わらび</sup>

使用する役柄『土筆<sup>どひつ</sup>』のシテ、『真奪<sup>しんばい</sup>』の「通りの者」など春の曲の役のほか、春の季節には様々な曲に使われます。



黒地芭蕉模様肩衣

使用する役柄『空腕』<sup>そらうで</sup>『清水』のシテ(いずれも「太郎冠者」)などに使われます。



紺地松藤花模様肩衣

使用する役柄『伊文字』<sup>いもじ</sup>のシテ「通りの者」や『因幡堂』<sup>いんぱんどう</sup>のシテ「男」などに使われます。

## すおう 素袍

「長袴」と同様、上下が揃いの色・模様ですが、広袖で、狂言では最も身分の高い「大名」に使われますが、それ以外にも、<sup>むこ</sup>「舅」<sup>しゅうと</sup>の役に使われます。その他、『末広』のシテ・「果報者」、『花子』のシテ・「夫」の役などに使われます。特殊な例を除いて麻地で、着付けは原則として「紅段熨斗目」ですが、「小紋素袍」の時は「段熨斗目」、『花子』の時は「唐織」を使用します。

「大紋素袍」は大名や舅、「小紋素袍」は主に舅の役に使われます。

「掛素袍」は、「狂言袴」の上に素袍の上着だけを着用するもので、『佐渡孤』の「百姓」のように、年貢を都へ納めに行く時の略式礼装として使われます。



黒地膨雀模様素袍



紺地藤花八橋模様素袍（花子専用）

## ながみしも 長袴

現代で言えば、スーツのようなもので、上下が揃いの色・模様になっています。麻地で小紋染が多く、着付けは必ず「段熨斗目」を使います。

「縞熨斗目・肩衣・狂言袴」の「太郎冠者出立」の者よりも高い身分の者、「主人」や、『佐渡孤』の「奏者」、「宿の亭主」、「仲裁人」などに使われます。また、『武悪』や『二千石』といった曲の「大名」の役にも使われます。



紺地花菱模様長袴

## はっ び 法被

緞子に金欄をあしらった広幅の袖の上着です。具足や鎧を表現したいが、ものものしさを避けるために、その代用としてこのような形の上着が考案されたと考えられます。どっしりと重厚で華やかな性格のもので、神や鬼、神鳴など、勇壮で重々しい役に使われます。



黄地矢車模様法被

## の し め 熨斗目

熨斗目とは本来、経糸を生糸、緯糸を練糸で織り上げた生地によって仕立てられた衣服を呼びます。また一説には、胸を緩めに開いて着た姿が、祝儀用の熨斗の形に似たところから、この名が出たとも言われています。

狂言では、「縞熨斗目」(「太郎冠者出立」の時に着用)・「段熨斗目」(「大名出立」・「小名(主)出立」の時に着用)・「無地熨斗目」(「出家出立」・「能力出立」の時に着用)があります。

縞熨斗目は格子柄の熨斗目で、格子の大きさは様々、色数は二色から三色です。

段熨斗目は横段の柄に織り上げた熨斗目で、柄幅の広い(五寸段)物と狭い(三寸段)物があり、更に細かい小段という物もあります。色数は二色から四色、身分や役柄によって着分けられます。段に細かい格子柄を加えた「江戸段熨斗目」は、段熨斗目の中では最も格調の高いものです。

段熨斗目のうち、紅と白の段のものを紅段熨斗目と呼び、これも柄幅に広い・狭いがあります。また「替紅段」と言って、紅と黄色、紅と薄紺、紅と茶、或いは三色四色と組み合わせられた物もあります。また綾織地紋の生地の物もあります。紅段熨斗目はこの上に、必ず「素袍」を着る決まりになっていて、狂言では「大名」・「果報者」(『末広』のシテなど)・「聳」の役に着用します。

無地熨斗目は単色無地で、役柄上、紺・茶・萌黄などの渋い色合いになっています。



紅段熨斗目



朱色牡丹二桜流水模様縫箔

ぬい はく  
縫箔

「綸子」・「緞子」・「縹子」などの生地に金銀箔を置き、そこへ刺繍を施したもので「小袖」の別名通り、本来は肌近くに着る衣服であったものが変遷を重ねて、「打掛小袖」などの上着となっていったものと言われます。

主として女性の役に着流しで着用されます。

あつ いた  
厚板

厚板とは本来、織物の総称で、薄手の織物「薄板」に対して、厚手の織りを「厚板」と呼びました。経糸は練糸、緯糸は生糸で織り、搦み糸で地並みに模様を織り出した生地を袷小袖に仕立てたものです。「色入」・「色無」という呼び方は赤系統の色彩の有無によります。どっしりとして、存在感・威圧感があり、それにふさわしい役柄に着用されます。

狂言では、神、鬼、山伏、武人（『朝比奈』や『首引』の「鎮西為朝ゆかりの者」など）に着用されるほか、『悪太郎』『金藤左衛門』などの「無頼の者」の役にも使われます。



濃緑地飛龍模様色無厚板

# 展示資料一覽

## 狂言装束

黄地立波模様肩衣  
 白地立波模様肩衣  
 納戸地立波錨綱模様肩衣  
 茶地鳥の模様肩衣  
 薄茶地蕨模様肩衣  
 黒地芭蕉模様肩衣  
 藍色地蝙蝠模様肩衣  
 紺地松藤花模様肩衣  
 黒地鬼瓦模様肩衣  
 茶地鬼瓦模様肩衣  
 黒地狂言袴  
 紺地花菱模様長袴  
 薄茶地鳴子模様素袍  
 黒地膨雀模様素袍  
 紺地藤花八橋模様素袍（花子専用）  
 浅葱地業平格子模様狩衣  
 萌黄地花ノ丸模様長絹  
 黄地矢車模様法被  
 茶地黒格子紐水衣  
 茜色地龍菱立波飛雲模様側次

紅段熨斗目  
 緑白大段熨斗目  
 浅葱白段熨斗目  
 朱色牡丹二桜流水模様縫箔  
 金茶地千鳥二網干模様縫箔  
 茶地秋草模様縫箔  
 楠玉模様唐織  
 紅白段鳳凰唐獅子模様厚板  
 紅地向イ鶴菱模様厚板（三番三専用）  
 濃緑地飛龍模様色無厚板  
 狂言『入間川』上演時装束一式

## 腰 帯

## 狂 言 面

武 悪  
 嘘 吹  
 子 猿  
 賢 徳

## 扇

## 冠

## 伝 書